

## 【学会報告】

### ＜第7回中国語用論シンポジウム＞報告

余 維

上記の大会 (The 7th China National Pragmatics Symposium) が 2001 年 8 月 6 日から 8 日までの 3 日間、中国の蘇州大学で開かれた。今回の大会は中国語用論研究分野の盛大な大会で、参加者は 150 名以上にのぼった。国内外から 60 余りの大学を代表して参加された。日本から、日本語用論学会会長小泉保教授、学会事務局長澤田治美教授、学会設立発起人会員余維助教授 (いずれも関西外国語大学) が招待を受けて大会に参加した。

8 月 6 日午前中に、短いながら熱烈な大会の開幕式が行われた。開幕式は蘇州大学外国語学院の王寅教授の司会により、まず広東外語外貿大学外国言語学及び応用言語学研究センター教授何自然氏が開幕の挨拶を行い、続いて蘇州大学副学長朱秀林教授が暖かい歓迎の挨拶を行った。今回のシンポジウムは中国語用論学界が 21 世紀において最初に開く盛会で、参加者は主として語用論の歴史的回顧、語用論理論の発展と現状、認知と語用論、異文化コミュニケーション、語用論と言語教育、語用論と翻訳などの研究テーマをめぐって、語用論研究の過去、現状そして未来に対して広く深い研究討議が行われた。大会は終始熱のこもった対話的なムードの中で行われ、結束、知新、着実の精神が溢れていた。

大会はそれぞれ 6 日、7 日と 8 日の午前中に三つの大会研究発表を行われた。広東外語外貿大学、復旦大学、浙江大学、河南大学、山西大学、蘇州大学、東北師範大学、西南師範大学、日本関西外国語大学など 10 の大学計 17 名の学者が大会発表を行った。分科会では、6 日、7 日の午後それぞれ 5 組ずつ計 115 名が中国語と英語で研究発表を行った。以下は午前中の大会研究発表を中心に述べることにした。

第一日、8 月 6 日の午前中の大会研究発表では、まず、関西外国語大学小泉保教授の「ジョークの語用論分析」を皮切りに、続いて大会は主に語用論の一般理論、その思想発展の歴史及び現在の動向をめぐって展開された。広東法商大学曾衍桃助教授が第 7 回国際語用論学会について論評を行い、合わせて国際語用論の研究動向を述べた。蘇州大学王寅教授が言語の擬似性発話 (diagrammatic utterances) と語用論の関係について、「擬似性原則の語用論分析」を題して研究発表を行った。西南師範大学文旭博士が中国古代語用論、ヨーロッパ伝統語用論とアメリカ実用主義の三つの角度から語用論の思想を遡って、「語用論思想の回顧——語用論思想史探索その一」を発表し、語用論の未来研究と発展に重要な理論価値と実践的な意義を有した。広東外語外貿大学冉永平博士は認知語用論の理論基礎、発展概況及び研究動向について解説した。

第二日、8 月 7 日の午前中の大会研究発表では、認知と語用論を中心に展開された。まず広東外語外貿大学何自然教授が「語用含意の推理」を題して、そのタイプ、直接的と間接的語用論的含意の推理照応をめぐって研究発表を展開された。続いて関西外国語大学澤田治美教授が語用論とモダリティの関係について研究発表された。さらに広東外語外貿大

学銭冠連教授が国内外の語用論研究課題の選択について対比研究を通して、中国語用論研究を発展させる提案を打ち出した。即ち「語用論を社会に向けて歩ませよ」ということで、具体的に、1、フィールド調査の必要性、2、地域社会日常生活資源の利用、3、人間行為の中から個別ケースの発掘重視のことである。その他、語用論理論の応用に関して、蘇州大学俞東明教授が「語用論と演劇の文体論」を題して研究発表を行い、香港大学沈三山博士が卓球試合解説の談話分析を行った。

第三日、8日の午前中の大会研究発表では、語用論の哲学基礎がテーマとなった。蘇州大学辛斌教授が語用論の関心事について、とりわけ言語、会話と発話場面の関係からバクハキン (M.M.Bakhtin) 語用論思想を論述した。東北師範大学張紹傑教授がサル (Searle) 言語行為理論の展開、発展とその哲学基礎を紹介した。河南大学張克定教授はワシユロン (Verschuieren) の語用論理論とりわけその語用綜観論と順応論がシンタックス研究に対する啓発及び指導意義を探った。蘇州大学王曉平教授がハバマス (Habermas) 普通語用論理論を論評した。

なお、筆者が分科会において、「レットリックの語用論——中国語のトートロジー (tautology) 語用論分析」を題として研究発表し、トートロジーが推意の産出した原因、中国語のトートロジーのタイプ、語用論的含意と機能をめぐって分析を行った。

懇親会では、小泉保教授が日本語用論学会会長として、挨拶され、中には日本語用論学会に関しては、学会の設立、現在の会員数、毎年学会誌『語用論研究』の刊行、今年の12月には大阪桃山学院大学で第4回日本語用論大会が開催される予定であることと、語用論に関する著書の紹介などを紹介し、最後に「このたび、私たちは中国語用論シンポジウムに参加し中国における語用論研究の実情に接することができ、非常にありがたく思っております。また、中国における語用論に関する盛んな研究活動とその熱意に深く感じ入っております。今後、中国と日本が語用論研究を通して互いに協力していくことを心から願っております。」と述べられた。挨拶後、日本の学会誌『語用論研究』を中国語用論シンポジウム代表者広東外語外貿大学何自然教授に贈呈、その際に満場の拍手が沸きあがった。

全体の印象としては、中国語用論シンポジウムは学術雰囲気が濃厚で、語用論の議題に関して十分な交流が行われて、国内外の語用論研究動向に比較的にはっきりした認識をもっており、発表者の数の多さ、質の高さ、しかも院生よりも殆んど現役の大学教師が中心だということを見ると、中国はもはや語用論研究が盛んな国になっているという印象を受けた。

なお、次回の、第8回中国語用論シンポジウムは2003年に広東外語外貿大学で開催される予定になっている。